

論文の内容の要旨

論文題目 日本語と韓国語の文末形式に関する対照研究
－「知覚表明」と「知識表明」の概念を中心に－

氏名 文彰鶴

本稿では、日韓両言語における<平叙文>の文末形式を対象にし、その対応関係について考察を行なった。その際、「韓国語のhay(yo)体の終結語尾に対応する日本語の文末形式を分析するにあたって、日本語の終助詞に焦点をあてるべきか、それとも日本語の確言形に焦点をあてるべき」という、問題が存する。

従来の研究においては、韓国語のhay(yo)体の終結語尾を日本語の終助詞との対応関係に焦点をあてて分析を行う場合が多かったが、本稿では、韓国語のhay(yo)体の終結語尾を日本語の確言形に焦点をあてて分析を行うことを提案した。このような提案を検証するために、検討すべき問題として以下のような問題を提起した。

(1)日韓両言語における<平叙文>の文末形式を考察するために検討すべき問題

- ①韓国語のhay(yo)体の終結語尾が担う意味に対応するものとして、日本語の終助詞ではなく、「確言形」に焦点を当てて分析できるか。
- ②韓国語のhay(yo)体の終結語尾と日本語の<平叙文>の「確言形」との対応に焦点を当てて分析する立場をとると、韓国語のhay(yo)体の終結語尾が日本語のネやダロウといった終助詞(もしくは終助詞相当形式)のように「確認要求的表現」として用いられる場合はどのように説明すれば良いか。
- ③韓国語のhay(yo)体の終結語尾と日本語の<平叙文>の「確言形」との対応に焦点を当てて分析する立場をとると、韓国語の終結語尾ci(yo)における、<平叙文>以外の用法についてはどのように説明すれば良いか。
- ④韓国語は「知覚表明」を表す形式としてneyとkwun二つを有するが、その違いは何か。そして、その違いは日本語ではどのように表現できるか。

本稿では、このような問題を考察するために、次のような「知覚表明」と「知識表明」という概念を導入することと「意味論」的意味と「語用論」的意味を区別することを提案した。

(2)①「知覚表明」と「知識表明」

「知覚表明」とは“話し手が発話時に発話現場で感覚器官によって知覚した内容の表明”であり、「知識表明」とは“話し手が既に知識として定着させている内容の表明”である。

②「意味論」的意味と「語用論」的意味の区別

「意味論」的意味は言語形式自体が有する言語的意味の問題であり、「語用論」的意味は言語形式の具体的な使用における解釈の問題である。

以上のような考察対象と問題のありか、そして、本稿の立場について、第1章で述べた。以下、第2章からの考察内容を簡単にまとめると次のようである。

第2章では、(1)①を検討するために、日韓翻訳本の調査や感動詞・叙法副詞との共起関係を分析した結果、韓国語の終結語尾と日本語の終助詞の間には一対一の対応関係が見られず、韓国語の終結語尾と日本語の<平叙文>の確言形(の意味分類)の間において、「知覚表明」対「知識表明」という命題めあて的な意味の対立に基づいて、密接した対応関係が見出された。

このような分析結果から、基本的に韓国語の終結語尾と日本語の確言形における言語形式自体が有する意味、つまり「意味論」的意味は、命題めあて的な意味機能であると理解される。ただし、具体的な「知覚表明」と「知識表明」という命題めあて的な意味を表すにあたって、日本語の確言形の場合は、一つの確言形が具体的な使用において、二つのタイプの意味、つまり「知覚表明」であったり「知識表明」であったりするもので、日本語の確言形における「知覚表明」あるいは「知識表明」という意味は、「語用論」的意味であるとも言えるであろう。

しかし、言語事実としては韓国語の終結語尾が日本語の終助詞に対応しているように見える場合も存在する。そのような場合は、韓国語の終結語尾自体が有する命題めあて的な意味機能が、発話現場で聞き手に対して発話されるという語用論的な文脈で日本語の終助詞自体が有する聞き手めあて的な意味機能(「確認内容伝達」、「注意喚起」など)としても使える場合であると考えられる。以上の内容を簡単に図で示すと次のようである。

	日本語		韓国語
<命題めあて的な意味機能 (「知覚表明」「知識表明」)>を担う形式	確言形 (「意味・語用論」的意味機能)	← 対応 →	終結語尾 (「意味論」的意味機能)
<聞き手めあて的な意味機能 (「確認内容伝達」「注意喚起」など)>を担う形式	終助詞 (「意味論」的意味機能)	← 対応 →	終結語尾 (「語用論」的意味機能)

表1. 日韓の<平叙文>の文末形式における対応関係

第3章では、(1)③を検討するために、「知識」における確信度のスケール」に注目し、「知識表明」を表すciの様々な意味用法間の関連性を分析した。その結果、ciの文は、基本的に「知識表明」を表す<平叙用法>を持ち、このような意味用法は形式自体が有する「意味論」的意味として理解される。そして、「確かな知識」あるいは「不確かな知識」を述べ立てる<平叙用法>のciが一定の語用論的な要因が加わることによって、他の用法(<疑問用法>、<命令用法>、<勧誘用法>、<意志用法>)へ拡張することが確認できた。

第4章では、(1)④のうち、韓国語のneyとkwunの違いについて分析した。neyとkwunは基本的に「知覚表明」を表すという点においては共通している。しかし、neyとkwunは「非納得」の感動詞と「納得」の感動詞との共起において、対立的な振る舞いを示し、このような共起現象から想定できる「入力情報の処理過程(「未知情報の遭遇段階」→「関連情報の探索段階」→「未知情報と関連情報のリンク段階」)からすると、neyは「未知情報の遭遇段階」を表しkwunは「未知情報と関連情報のリンク段階」を表すという点において異なることが確認できた。

第5章では、(1)④のうち、韓国語のneyとkwunの違いは日本語ではどのように表現できるかという問題を取り上げた。韓国語におけるneyとkwunの違いは、意味用法や感動詞との共起関係、文脈による置き換えの可否を検討した結果から、日本語における非ノダとノダの違いと並行していることが確認でき、特に、neyは非ノダに、そしてkwunはノダに対応することが分かった。

第6章では、(1)②を検討するために、日韓の確認要求的表現の内実を分析した結果、「確認要求」や「同意要求」という機能を果たすという目的は同じであっても、その機能を発現させるメカニズムは異なり、韓国語では命題内容が知識か知覚かという命題めあて的な要因が働いており、日本語では話し手の認識と聞き手の認識の一致可否という聞き手めあて的な要因が働いていることが確認できた。

第2章で、表1のような日韓両言語の文末形式における対応関係について述べた。このような第2章の主張は、第3章と第6章の分析結果からも支持される。つまり、「確認要求的表現」のように韓国語の終結語尾が日本語の終助詞に対応しているように見える場合、あるいは韓国語の終結語尾ciのように<平叙文>以外の意味用法を持っているような場合においても、韓国語のhay(yo)体の終結語尾は基本的に<平叙文>における「知覚表明」と「知識表明」という命題めあて的な意味機能が根底で働いており、そのような意味機能が発話現場で具体的に使用されることによって、日本語の終助詞が有するような確認要求的な意味機能、あるいはciの<平叙文>以外の意味用法を発現させているのである。

このような本稿の分析結果から、日韓の<平叙文>の文末形式の対応関係を理解するにあたって、まず韓国語の終結語尾と日本語の確言形の対応関係に焦点をあてて理解し、その後に韓国語の終結語尾と日本語の終助詞の対応関係を理解するのが望ましいと考えられる。